

メキシコ・メディア教材プロジェクト（一）

外国語学部 スペイン語学科3年 鹿熊 あずさ

今年、後藤ゼミナールでは、メディア教材プロジェクトの題材として、「メキシコ」を選んだ。一昨年の「コスタリカ」、昨年の「キューバ」に続いて第3弾となる今回のプロジェクトの題は、「メキシコの二つの顔—光と陰—」である。光と陰とは一体何なのか。それを知るために、4月から、まずはメキシコについての猛勉強が始まった。

メキシコを知ることが、この国の光と陰を明らかにすることに繋がる。そう考え、私たちが調べたことは多岐にわたる。メキシコの歴史、労働状況、環境、先住民、産業、貿易、ストリートチルドレン、貧困問題など。それぞれを分担し、各自が責任をもって調べ、発表、質疑応答、意見交換を8月のゼミ合宿まで繰り返し行つた。そうして見えてきたものが、近代化に

よつて、どんどん発展し、豊かになつていくメキシコの姿である。高級住宅街、ショッピングモール、1994年にアメリカ・カナダ・メキシコの3カ国で結ばれたNAFTA（北米自由貿易協定）、それによつてメキシコに進出してきた外国企業のオフィス、高級車が進出してきた。しかし一方で、近代化の波に飲み込まれ、それに取り残されていくメキシコ。街の至る所で目にする露店、靴磨き、スラム、貧困問題、ストリートチルドレン。それがメキシコの光と陰で、9月に入り、いよいよ現地取材へ。事前にグループ分けをし、各グループで何を取材し、撮影するかは決めてあつたので、ほとんどがグループ行動だつた。もちろん我々日本人だけで、あまりに危険なので、メキシコ人のコーディ

あつた。

9月に入り、いよいよ現地取材へ。事前にグループ分けをし、各グループで何を取材し、撮影するかは決めてあつたので、ほとんどがグループ行動だつた。もちろん我々日本人だけで、あまりに危険なので、メキシコ人のコーディ

で、如何にももとつた感じの高級住宅街があり、外国企業のオフィスビルが立ち並び、大きなショッピングモールがあり、その中には高級ブランドで、当然、物売りをする人も、靴磨きをする人もいない。シティの騒然とした様子とは打つて変わって、閑静な雰囲気を醸し出している。人々の身だしなみもきちんとしていて、メキシコの光の部分を象徴するような街だつた。

メキシコに来て印象的だったのが、人々の表情だ。私が持つていたイメージは、物売りとか靴磨きをしている人々、つまりは陰の部分に属してしまう人々の表情は当然、暗いものだと、そう思つていた。春にスペインに行つたとき、街には物乞いをする人がいた。その人たちは決まって「Soy pobre, por favor ayudame. (スペイン語で)『私は貧しい、助けてください』と言つていた。その顔にももちろん笑顔はなかつた。その印象が強く、メキシコはいわゆる発展途上国。「自分は不幸だ」と思つている人は「不幸」という表情をしていると思つていた。しかし、実際に行つてみると、そんな表情をしている人はいなかつた。むしろ明るいと言つてもいい表情を浮かべていた。自分の生活を不幸だと思つている人はいらないと思えるほどだつた。確かに彼らは貧しい生活をしている。だが、それを誰かのせいにするとかではなく、自分たちの力でどうにかしようとする。誰かの手を借りて立ち上がるのではなく、自力で立ち上がるうとする。それはメキシコ人の強みなのか。歴史が彼らをそうさせるのか。

メキシコは300年もの長い年月をスペインに支配されてきた。しかしへきシコ人は立ち上がり、独立を果たす。それは誰かの力を借りる

のではなく、メキシコ人自身が起こしたことだつた。独立後も、フランスによつて帝政にされても、ディアスの独裁政権が起きて、彼らは自分たちの力でメキシコをよりよいほうへ導こうと運動を起こした。そうした度重なる運動で、メキシコ人には自分たちが国を変える、自分たちこそが国であるといつた意識を培つていつたと思う。そしてそれは今でも変わらない。私たちがメキシコに行つた今年（2006年）は、6年に一度の大統領選挙は波乱を極めた。フォックス大統領の後継者、カルデロン候補に不正投票があつたと言われ、対するオブラドール派は選挙管理委員にそれを訴え、票の数えなおしが行われたが、結果は変わらず、カルデロンが勝利。それに納得がいかないオブラドール派は、首都、つまりメキシコ・シティの主要道路を占拠し、デモテンントが張られた。私たちが泊まつたホテルの前の道路も占拠されていた。いつ暴動が起きてもおかしくはない状態だつた。日本では決してありえないことだ。政治に対して、ここまで行動を起こすなどということは日本ではまずない。自分が支持した人が落選しても、反対デモ

を起こし、道を占拠するなんてこともまず起りえない。そもそも日本人は政治に関心がない

よつて、どんどん発展し、豊かになつていくメキシコの姿である。高級住宅街、ショッピングモール、1994年にアメリカ・カナダ・メキシコの3カ国で結ばれたNAFTA（北米自由貿易協定）、それによつてメキシコに進出してきた外国企業のオフィス、高級車が進出してきた。しかし一方で、近代化の波に飲み込まれ、それに取り残されていくメキシコ。街の至る所で目にする露店、靴磨き、スラム、貧困問題、ストリートチルドレン。それがメキシコの光と陰で、9月に入り、いよいよ現地取材へ。事前にグループ分けをし、各グループで何を取材し、撮影するかは決めてあつたので、ほとんどがグループ行動だつた。もちろん我々日本人だけで、あまりに危険なので、メキシコ人のコーディ

で、如何にももとつた感じの高級住宅街があり、外国企業のオフィスビルが立ち並び、大きなショッピングモールがあり、その中には高級ブランドで、当然、物売りをする人も、靴磨きをする人もいない。シティの騒然とした様子とは打つて変わって、閑静な雰囲気を醸し出している。人々の身だしなみもきちんとしていて、メキシコの光の部分を象徴するような街だつた。

ネーターが各グループに一人ずつ付いた。私たちのグループは主にメキシコの近代化を担当。そのため、撮影した場所のほとんどが、貧困などのそういう陰の部分とはかけ離れたところばかりで、思わず陰の部分を忘れてしまうことあつた。撮影に行つたサンタ・フェという街は、メキシコ・シティから車で30分くらいの街で、如何にももとつた感じの高級住宅街があり、外国企業のオフィスビルが立ち並び、大きなショッピングモールがあり、その中には高級ブランドで、当然、物売りをする人も、靴磨きをする人もいない。シティの騒然とした様子とは打つて変わって、閑静な雰囲気を醸し出している。人々の身だしなみもきちんとしていて、メキシコの光の部分を象徴するような街だつた。

いているそうだ。なかなか改善に向かわないのが現状だが、諦めることはない。悪条件でも諦めないのがメキシコ人。諦めないで戦って、解決する。どれだけ時間がかかっても、解決する。そういう国がメキシコだと少し思えた。

また世界的バイオリニストである、黒沼ユリコさんにも取材をすることが出来た。黒沼さんは現在メキシコ・シティでバイオリン教室を開いているのだが、以前はインディヘナ、いわゆる先住民の村に暮らしていたそうだ。メキシコではインディヘナに対する差別問題もまだ残つており、彼らが村の地主によつて虐殺されてしまうということもしばしばあつたそうだ。それは今でも、表面化していないだけで、起つているという。先住民の問題も、ストリートチルドレンと同様、時間をかけて解決していくなければならない問題だ。黒沼さんのバイオリン教室では、お金持ちの子も貧しい子でも、バイオリンが本当に大好きでやりたい、という子が通つている。実際に練習風景を見学させていただいたが、どの子も表情は真剣そのものだった。見た目で言えば、肌が白い子も黒い子もいた。日本で言う「同じ釜の飯を食つた仲」ではないが、肌の色や貧富の差を越えた環境で一緒に何かを学んでいく、というのは彼らの将来に大き

な影響を与えることは間違いないだろう。

今回、メキシコを題材にし、勉強し、実際に現地で色々ものを見て、多くの人に話を聞くことで、ほんの一部ではあるがメキシコという国を知ることが出来た。

「メキシコの二つの顔—光と陰—」は単にこの国のプラス面（光）とマイナス面（陰）のことを表しているのではなく、光の中にも陰は存在し、陰の中にも光は存在するということ。そして今はまだ、富裕層、貧困層、そしてインディヘナの考えがばらばらなメキシコ。これらの考えが1つになつたとき、メキシコはまた大きな1歩を踏み出せるのではないかだろうか。

最後に、このメディア教材プロジェクト「メキシコの二つの顔—光と陰—」によって、多くの人がメキシコに関心を抱き、この国について考えてくれたら嬉しく思う。